

ワークショップによる災害時遺族支援に関する効果的な研修企画についての

検討 (久保田千景ほか、日本災害看護学会雑誌 19(2):15-24, 2017)

2018年7月27日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

災害急性期において、黒タッグを装着された方の家族は、愛する人を喪失したことから、心理的・身体的に危機的状況にあるということが考えられる。したがって、悲嘆や喪失という特定の状況にある家族を理解するとともに、支援についての知識の習得が必要であり、対象者を知ることや理論・モデル等の一般論を含めた知識の習得が必要であると考えられる。

今回、日本DMORT (DMORT: Disaster Mortuary Operational Response Team 災害死亡者家族支援チーム) 研究会が実施しているDMORT養成研修の内容のうち、DMORTの活動及び災害急性期における遺族の心理等に関することを含め、主に看護職を対象に、災害急性期における遺族支援についての学びを共有するワークショップを目的・目標を明確にして開催された。

データ収集は無記名のアンケート方式とし、アンケート回答項目の選択項目を5段階で設定(とてもそう思う: 5~全くそう思わない: 1)した。また、講義内容に対して感じたことを自由記術にした。

アンケート結果をもとに、より効果的なワークショップを開催するため課題の整理と検討を行った。

1. ワorkshop参加者の準備性について

本ワークショップの対象者の年齢は、30歳~50歳代に該当し、看護師・教員経験年数を考慮すると豊かな看護経験を持ったものであった。沖ら(2003)は、「一人前の看護実践能力は対象のニーズを把握でき、患者とともにいる能力が持てる。中堅の看護実践能力では、患者だけではなく家族に対しても情緒的サポートと情理的サポートを行う能力を持つようになる」と述べており、対象者の準備性としては適切であったのではないかと考えられる。

2. ワorkshopの目的・目標の提示について

本ワークショップでは、ワークショップの目的・目標を明記したものを配布した。さらにアンケート調査内容は、予め提示した目的・目標を具体的に行動目標化している場合はそれをそのまま評価目標として活用することができるといわれている。このような方法をとることにより、講義内容の教育的効果を高めることができたのではないかと考える。

3. ワorkshopで実施した講義について

1) 講義「DMORTとは」

対象者からは、現状についてもっと詳しく聴きたいという希望が聞かれたが、ワークショップという短時間であるため困難であると考えられた。しかし、対象者がDMORTの活動に対して興味を持っていることが確認でき、今後は内容を再考し、短時間でもDMORTに関する知識を得ることができるような内容となるように充実を図ることが必要である。

2) 講義「災害急性期における遺族の心理」

アンケート結果と自由回答から、概ね災害急性期における遺族の心理についての学びを深める子田ができたのではないかと考える。災害急性期における遺族の心理について学んだことをより深めてい

きたいという参加者の認識を踏まえて、今後も学習意欲が高まるような内容を検討していきたい。

3) 講義「遺族支援、遺族の思い」

遺族支援や遺族の思いについて、また災害急性期における遺族の認識の実際を知ることで、リアリティのある現状を知ることが可能となり、アンケート結果と合わせて概ね、支援の必要性に対する認識を深めることができたと考えられる。この講義は、看護師自身としてどう認識するのかということに着目するための講義となったことが考えられる。

4) 講義「家族看護と遺族支援」

前向きな意見を得られたが、アンケート結果のスコアがほかの講義内容に比して低く、講義内容の難しさが伺えた。今後は参加者の知識に応じた講義内容を検討し実践者の方々の学問的視野を広げることで、実践をより質の高いものにする必要がある。

5) 講義全体を通して

講義により参加者自身の知識を深めることが可能になったこと、また自身の持っていた知識を再認識する機会となったこと、さらに実践したいという思いにつながったと考えられる。その反面、自分には出来るだろうかという認識、実践することの困難さを再認識することにもなったと考えられた。

4. ワークショップにおける意見交換について

意見交換の場においては参加者自身の思いや遺族支援の実践の難しさについて、言語化し、認識したり、確認したり、整理することが可能となったことが考えられる。アンケート結果からも概ね、遺族支援に対する考えを深めることができたのではないかと考える。その反面、「時間不足により満足な意見交換にならなかった」「不全感が残った」という意見も聞かれたため、限られた時間でも有意義な意見交換が出来る様、ワークショップ全体の時間配分を考慮していく必要がある。

5. 講義・意見交換を通して

今回のワークショップにおいて、参加者は講義を聴講し、意見交換を行うことにより、災害急性期における遺族の心理、遺族支援の実際や遺族の思いについての知識を得ることができたと考えられた。また、参加者間で自己の経験や知恵を出し合うことにより多様な意見に触れ、共通認識を深めることができたのでは考えられた。さらに、災害急性期における遺族支援に使用できる家族管理について学ぶことにより、学問的視野を広げることができたと考えられた。一方、ワークショップにより、講義内容に対する理解の困難さや、災害急性期において遺族支援を実勢することに対し、戸惑いを感じることを再認識するきっかけとなったことが考えられた。